

藤枝市議会・会派「藤のまち未来」 行政視察報告

氏 名 ( 遠藤久仁雄 )

日 時	令和4年7月14日(木)
視 察 先 1	愛知県豊田市足助「おいでん・さんそんセンター」
研修テーマ(視察項目)	移住・定住対策の取組状況と課題について
<p>① 取り組みの経緯・内容など</p> <p>豊田市は、人口約42万人、面積918km<sup>2</sup>の中核都市である。トヨタ自動車(株)を中心とする自動車工業都市であるが、市域の多く7割は山村部が占めている。2005年に「21世紀都市・豊田市」の実現を目指して周辺6町村と大合併をしたが、山村部に暮らす人口は年々減少して来ている(現在は2万人強である)。都市と山村が共存することは素晴らしいことだが、山村部の人口減少が加速し、合併の成果が見えにくくなってきた。そこで2018年に「SDGs未来都市」を掲げ、都市と山村が共存し、広い市域に有する豊富な地域資源、様々な人、企業、技術が集まる豊田市の特徴を生かした持続可能な地域づくりに向けた取り組みがはじめられた。中心となるのは、2013年に立ち上げた「おいでん・さんそんセンター」である。都市部の「豊田市つながる社会実証推進協議会」と、山村部の「おいでん・さんそんセンター」の2つがプラットフォームとなり、企業・団体等や多様な人が分野の垣根を越えて繋がりながら、SDGs達成に向け貢献している。</p> <p>② 今後の課題など</p> <p>説明の中では、まだまだ市民にいろいろな情報が行き届いていないので、今後の情報発信に工夫が必要であるとの話をされたが、これだけ豊富な自然環境と人材に恵まれた都市である。可能性はいくらでもあると感じられた。都市部は公共施設を始め十分なほどの充実ぶりである(豊田市美術館・豊田スタジアム・コンサートホール等)。山村部にも多くの景勝地・温泉があり、伝統的な祭りや様々な文化が残されている。都市部と山間部の人的交流をさらに進めることで、お互いの地域に暮らす人々に幸せをもたらすことに繋がるのだろうと感じた。</p> <p>③ 本市に反映できると思われる点</p> <p>規模が違いすぎるので比較しにくいのですが、例えば移住定住事業を始めとして豊田市は多くの面で先進市なので、有効と思われる事業については本市に進んで取り入れていけばよいでしょう。いただいた資料の中に「とよたまちさとミライ塾プラス」と「とよたつながる博」がありました。本市では主に商店経営者が中心となり「まちゼミ」が行われているが、豊田市の方が趣味を生かした大勢の人が、気軽にお遊び的な企画を紹介していてユニークで楽しそうに感じられました。体験型の案内が多いのが特徴です。</p> <p>④ その他(感想、意見)</p> <p>人口減少とともに、将来は地方自治体も財政規模が縮小していき、職員も減っていくであろう。当然市役所がやれる仕事も限られてくる。豊田市はそんな時代を先取りし、自分たちの生活はできるだけ自分たちの手で作り上げていこうという自主の考えだ。役所に隣接して設置された民間法人に運営を任せ、住民の手で自分たちの暮らしに関する問題を解決し、自らの手で地域づくりを行うという「未来の市役所」を目指している。この考え方は大変価値のある試みだと思う。本市でも、住民同士の関わり合いが希薄化しているように感ずる。事業ごとにタイミングを図り、民営化することは意義がある。ただ安易な委託だけはやめてほしい。要は、真剣にやる気があるかの問題であろう。</p>	

日 時	令和4年7月15日(金)・16日(土)
視 察 先 2	徳島県神山町産業観光課、「(一社) 神山つなぐ公社」、他
研修テーマ (視察項目)	移住定住対策の取組状況と課題について

① 取組の経緯・内容など

2014年に日本創生会議が発表した「増田レポート」は、今後2040年までに1800の自治体の約半数が消滅すると予測した衝撃的なものであった。中でも神山町は、人口減少率が全国で20番目に高いというランク付けであった。すでに町内では中学校は1校に統合され、唯一の県立高校の農学校分校も大幅な定員割れが続き、いつ廃校となってもおかしくない状況であった。しかしこのような危機的な状況から、神山町のためにと多くの人々が関心を持ち、この土地で様々なアクションを起こした。そこには町内在住者のみならず、町外から移り住んできた人との心地よい営みが見られる。初めに2015年に神山町創生戦略が策定され、この施策を進めていくための地域公社として、一般社団法人「神山つなぐ公社」が設立された。この公社を中核として様々な事業が取り組まれているが、その中で地域の城西高校神山校を中心とした活動が大きな成果を上げている。今では分校ではなく、単独の農業高校として県外からも生徒を呼び込むなど、町民から大切にされて独自の発展を遂げている。そしてこの神山校を始め町内の農業を支える会社として2016年に設立された「株式会社フードハブ・プロジェクト」の存在が大きい。ここでは町内で米・麦・野菜・果樹を生産し、町内にある食堂・パン屋・加工所を運営している。地元の生産品を流通経路に乗せ、マーケティング力を発揮するなどの支援も行っている。また耕作放棄地を引き取り、農業研修生の受け入れと自立までの支援も行っている。農業従事者の高齢化が進み後継者不足問題や、耕作放棄地の増加問題など、神山町の農業の存続に真っ向から立ち向かう戦略となっている。

② 今後の課題など

ここまで急速に発展を遂げている神山町に対し、課題などを考えること自体、失礼に当たると思います。神山町の素晴らしいところは、スタッフや町民が決して無理をしていないということです。お互いを信頼して、試行錯誤を続けています。協力していただけることは何でもお互いをお願いします。学校や役所、事業所、個人経営者などの垣根はありません。この考え方が生きています。町民がお互いに力を出し合って、そこに暮らす人々を助け成長していくという好循環です。

あえて課題として取り上げるなら、小麦や米、すだちをはじめとする農業生産物の生産性をこれまで以上に高めることでしょうか。町内全体の農業従事者への生産物と流通販売に関するノウハウを全体で研究していくことが大切かと考えました。

③ 本市に反映できると思われる点

本市で神山町のような施策が有効かということ、自治体の置かれている状況や規模が違うので難しいと思います。ただ本当に地区を絞って取り組むのなら、一般社団法人を立ち上げ、事業化することはできるかもしれない。しかし問題はそこに集う確固とした目的と情熱を持った人の集合が可能かどうかである。午前伺った神山町役場での2名の担当者からの説明では良さがわからなかった。しかし午後のつなぐ公社の馬場さん、翌日のフードハブの樋口さんの話は、目に鱗でした。やっぱり、キーとなるのは人ですね。

④ その他(感想、意見)

神山町は、古き時代から、外部からの訪問者を受け入れることに寛大であったようだ。町内

の奥地には、四国霊場 12 番札所の焼山寺があり、全国から年間 16 万人の来訪者が今日まで続いている。そのためか町内の山奥深くまで「アーティスト・イン・レジデンス」として作成された、自然とマッチする多くの芸術作品が 20 年も前から残され、来訪者を楽しませてくれている。こんな町だからこそ、外部からの志を持った人々を受け入れ、共に生活することができたのかもしれないと感じました。人口規模が約 5000 人という風光明媚な小さな田舎町であり、互いに顔の知れた人がほとんどであり、何をやっても安心感がある。高校生が町内の大人たちと交わり、活動するフィールドが用意されています。

神山町の 4 つの基本方針の中で、私は「人を育てる」に着目しました。地域にとって最も重要な資源は「人」です。将来を担う人材や、地域を支える後継者を、学校や家庭、地域が関わりながら育てていく。互いの向上心を尊重し、認め合いながら努力していく姿、自己肯定感を養うことができる活動が行われています。まさに人の学び場です。

これ程までの短期間に、生き生きとした姿を見せられるようになった神山町。徳島駅からバスで約 60 分の距離にある山村が、日本中から注目されるようになったのは、町の施策の成功は勿論ですが、そこに生活する人々の日常の暮らしぶり、人と人との信頼関係が出来上がっていることに気付いたからだと思いました。町民がお互いにこの町で自分は受け入れてもらっているという安心感、そして居心地の良さを感じている。また、そんな姿が、町内外から認められているからだと思います。休日にわざわざこのまちを訪れる人たちは、そんな思い入れの強い町でのんびりと食事をしたり、癒しを求めているのだと感じました。